

会津大学短期大学部研究年報第56号 pp. 53～ 69 (1999)

研究ノート

国外研修報告

**ワーズワスのスコットランド周遊
(1803年)の跡を辿って**

近 藤 哲

はじめに

私は今年度（平成10年度）8月6日から30日まで、英国での研修の機会を与えられた。研修の目的は二つあった。一つは、「ワーズワス夏期学会」(Wordsworth Summer Conference)に参加し、ワーズワス研究の最新の動向を知ることである。当学会の会長であり、詩人ワーズワスの子孫でもある Jonathan Wordsworth 氏をはじめ、Robert・Pamela Woof ご夫妻、Stephen Parrish、Kenneth Johnston、Bill Herbert、Frederick Burwick、Rachel Trickett、Annalisa Goldoni といったワーズワス及びイギリスロマン主義研究をリードするそうそうたる研究者の警咳に接することができ、大きな感動と教示と刺激を与えられた。

研修のもう一つの目的は、ワーズワスが試みたスコットランド周遊の旅程を辿ることである。1803年8月、ワーズワスは妹ドロシー、詩人コールリッジと共に湖水地方からスコットランドへ旅立った（コールリッジとは途中で別れる）。旅程は1千キロを超え、期間は43日間に及ぶ長旅であった。彼はこの旅の思い出をもとに16篇の詩を作り、それらに *Lyrical Ballads*(1800) に既に載せたバラード1篇を加え、最終的に“Memorials of a Tour in Scotland, 1803”としてまとめた⁽¹⁾。この中には、詩人の代表作と見なされる名品——‘To a Highland Girl’、‘Stepping Westward’、‘The Solitary Reaper’ など——が収められており、この旅が詩人に与えた影響は小さいものではなかったことが了解される。

崇高な思いに引き込む峨々たる山岳美や轟音を響かせながら迸る溪流、あるいはヒースの赤紫色に燃えるなだらかな丘陵やゆったりとうねる豊かな水の流れが、詩人の詩的靈感にどのように触れたのかを肌で受けとめるため、私はこの旅のルートをできるだけ忠実に辿ることにした。ただし別の目的のため、また時間の関係でルートからはずれることもあった。ワーズワスたちの旅と私の追体験を記すのがこのエッセーの目的である。ただし記述はテーマ毎にまとめたので、日時の順序に従っていない。そういうことで、これは論文ではなくあくまでも研修報告にすぎないことを断っておかなければならない。これをもとにやがて論文が成ればと思っている。

1. 旅程ルート

ワーズワス兄妹は、8月14日午後グラスミアの家（現在はダヴ・コテッジという名称で保存公開されている）を出発した。この旅の8年後に、ワーズワスはその出発時の自分の気持ちを回想し、‘Departure’（「旅立ち」）を書いている。そこでは、グラスミアは「地上で最も美しい場所」（1.18）であり「幸せな平原」（20）と歌われ、一方スコットランドは、「暗黒と寒気の地」（10）

であり、「このうえない荒涼とした岸边」(25)、「荒れ果てた荒野」(26)と捉えられている。従ってそこへ向かうワーズワスの足取りは「ためらい勝ち」(29)なのである。なぜ詩人はこのような状況下、敢えて旅立ったのだろうか。彼は前年10月4日に幼なじみのメアリと結婚し、この6月18日には長男ジョンが誕生したばかりである。新たな生命の誕生は詩人にとって大きな喜びであったはずであるが、どうして6週間も家をあける気になったのか、測り難いものがある。

ともあれ、その晩はケジックのコールリッジ宅に泊まり、翌日11時20分コールリッジと共に出発し、国境へ向かう。スコットランドはダムフリーズから北上し、グラスゴー、ロモンド湖を経てハイランドに入り、グレンクロー、グレンコーの山岳地帯を抜け、ブレアアソルに至る。ここが旅程の北端である。ダンケルドを経てトロサクスに遊び、エディンバラ、メルローズを回って9月25日夜8時過ぎグラスミアに無事帰還する。まもなくドロシーは旅の思い出を日記体で書きとめ始めた。プライベートな日記でなく、親しい友人たちを読者と想定して書いたのである。執筆期間は3つに分かれる。(1)1803年9月～12月末、(2)翌年2月2日～7月、(3)1805年4月1日～5月31日である⁽²⁾。

Recollections of a Tour Made in Scotland A.D.1803 として初版が世に出たのはワーズワス兄妹の死後で、1874年であった。上の3つの執筆期間によって外界の取り上げ方と文体に違いが見出されるが、旅の途上で出会った自然の風景や人物たちの克明な描写と記録によって、ルートを特定することができる。セリンコート編⁽³⁾にはその地図がA4版で挿入されている。なお本論に掲載した地図はウォーカー編からのコピーである。ウォーカー編にはもう一枚、カテリーヌ湖とトロサクス地方を歩いたワーズワスたちの詳細なルートの地図も掲載されており、セリンコート編の地図では明瞭でなかったその地域の消息が明らかになっている。

私は8月15日、グラスミアでのワーズワス学会を終えた後、エディンバラまで列車で向かった。本来ならグラスミアから馬車で一巡すべきであるが、それは不可能な注文であろう。私はレンタカーで、エディンバラを起点としてワーズワスたちのルートを辿り、26日にエディンバラに帰着した。

2. エディンバラ

ワーズワスたちがヒースの花咲く平原を眺めながらサーク川を渡ると、そこはスコットランドであった。3人がコールリッジの手配した一頭立て二輪馬車に乗って国境を超えたのは17日である。当時、彼らは万全の体調ではなかったらしい。ワーズワスは疲れやすく健康に自信が持てなかった。コールリッジは持病の痛風に悩まされ、痛みを柔らげるために服用していたアヘンチンキの副作用により身体の左側全体に麻痺性発作を起こすこともあった。医者は、スコットランドの雨と寒さの中であっても、旅の興奮と運動がコールリッジを健康にするだろうと思い、彼に旅を勧めたという。そうした状況であれば、1千キロを徒歩で踏破するのは危険な冒険と察したのであろう。馬車を準

備したのは賢明な選択といわなければならない。徒歩といえば、もともと病弱であったキーツが、1818年友人ブラウンとランカスターから湖水地方を抜け、スコットランド西海岸沿いに北上し（途中北アイルランドにも寄り）、インバネスまでの43日間ほとんど歩き通した（カーライルからダムフリーズまでは馬車）ことが想起される。彼は過労のためインバネスで体調を崩し、そこから北への旅を断念せざるをえなかったのである。ひとりクロマティから船でロンドンに戻ったキーツは3年後に26歳の若さで病没するが、このスコットランド徒歩旅行の無理が死因のひとつであろうと言われている。

ワーズワス一行がエディンバラに到着したのは9月15日の日没前であった。宿の White Hart で茶を飲んで「幸いにもすぐ近く」の城へ出かけている。すでに夕暮れの帳が下り、遠望がきかなかったという。現在もその宿はパブ兼ホテルとして残っている。いかにも由緒ありそうな古めかしい入口の上には、文字通り白鹿の図柄も人目を引く‘WHITE HART INN’の看板が堂々とぶら下がり、さらにれいれいしく次のようなバーンズの詩の一節を記した板が入口の左手に嵌め込まれている。それは宿のすぐ裏手のがっしりとした岩盤に聳え立つエディンバラ城を讃える歌である。

“Edina Scotia’s darling seat!

All hail thy palaces and towers

Where once beneath a monarch’s feet

Sat legislation’s sovereign powers”

Robert Burns

さらにこの詩文の下には、「バーンズがジェニー・クロウの死ぬ直前に彼女に会いに来た時、彼が泊まったのはこのホワイト・ハートであった」という意味の英文があり、彼女を説明するバーンズの言葉——“a girl who had the misfortune to make me a father”（「私を父とする不運を持ち合わせてしまった少女」）——が記されている。彼は男女関係においては自由放埒な青春時代を送ったらしい。なにしろ5人の女性に5人の私生児を産ませ、妻となる女性には結婚前に双子を2回産ませたというから、その天衣無縫にあきれるばかりである。ジェニーという女性は、バーンズがエディンバラに過ごした時、彼の私生児を産んだ女中である。彼は子供を引き取ろうと申し出たが、ジェニーは拒否し、ひとりで育てたということである⁽⁴⁾。この母子のその後の消息はわからないらしいが、この宿はバーンズとも縁があるのであった。パブの内部には写真やら新聞の切り抜きやらが雑然と貼られていた。その中にワーズワスとの縁について語るものがあったかもしれない。確かめる時間もなくパブを出たのは残念と、今になって思うのである。

翌日兄妹は雨の中、ホーリルード・ハウスやアーサーズシートにある廃虚・聖アントニーの礼拝堂や井戸を見学し、また旧市街を散策しては予期以上の街のたたずまいに満足し、夕方6時ころ次の目的地ロスリンに向かって出発した。もう1泊したかったようであるが、先を急いでいた。私も

強風と小雨の中、型通り彼らの訪ねた所を巡ったが、ときはサマーフェスティバルの真っ最中、市内至る所喧騒と狂態の真っ只中であった。真夜中の0時から花火が打ち上げられる騒ぎに、城のすぐそばにホテルをとった私は旅の疲れを癒す時間を奪われる始末である。17日午前11時、エディンバラの雑踏を後にしてロスリンへ向かった。

3. ヤロー川に沿って

ロスリン村には兄妹が泊まった二階建てのインが残っている。チャペルと隣あい、壁は大小さまざまな石やレンガがむき出しになり、歴史を偲ばせる。小さな入口のドアのすぐ上には1660の数字が刻まれている。340年も昔からある建物なのだろう。現在は宿には使用されていないが、ドアの右手には銅板がはめこまれ、1866年までインとして旅人に便宜を与えていたことがわかる。そこに滞在した有名人の名が刻まれ、エドワード7世、サミュエル・ジョンソン、ボズエル、バーンズ、ネイスミス、スコット、そして最後にワーズワス兄妹の名が認められる。

兄妹は18日、ピーブルズの町から1マイル半離れたニイドパス城へ寄る。それはツイード川辺に立つ「見捨てられ、荒廃した」「強固な四角い要塞」であった。低い山々と羊の点在する緑野、丘陵に沿って曲がりくねり、ささやくように音をたてながら流れるツイード、それらは「調和した風景を作りだし」、「そこには何も望まぬ」とドロシーは記している。現在その城は観光スポットになっており公開され、城の窓から望めるツイードの流れは今なお美しい。詩人スコットも昔この城で愉快に過ごしたことを、兄妹は前日、本人の口から聞いていたが、ワーズワスはスコットの話をもとに、この日に、この場所に関するソネット‘Composed at —— Castle’を作った。

“Memorials”に収められた17篇の詩の中で、その日の出来事をその日に作ったのはこのソネットだけである⁽⁵⁾。この詩の前半は、かつてニイドパスの森の聖なる木々を伐採するよう命じたダグラス卿の悪事を批判するものである。そしてドロシーが「最後の5行がその場の感情をよく伝える」と言っているように、今なお残る美しい風景を描くことで詩は結ばれている。

兄妹はこの日はツイード川に沿って散策しながらクロヴンフォードまでやって来た。ピクチャレスク（絵画的）な美を探求する旅人を満足させるようなさまざまな形態の組み合わせをドロシーはそのあたりで見出している。そしてヤロー川がすぐそばであることを知り、その流れを訪ねることを思い浮かぶのであるが、「将来の楽しみのためにとっておこうという結論に達する」のである。なぜ彼らは訪ねなかったのか、その理由は「将来の楽しみのため」なのか、またワーズワスが後に、‘Yarrow Unvisited’で述べている理由のためなのか、よくわからない。Moormanは「おそらく彼らはただかなり疲れていただけなのだ」⁽⁶⁾と、味もそっけもない。

19日、兄妹はスコットに案内されツイード川や廃虚・メルローズ寺院を巡る。その晩3人はスコッ

トの知人の家に泊まり（ワーズワスとスコットは同室）、翌日スコットはジェドバの州裁判所へ行く。彼は州知事の立場にあったから公務で多忙であったのだが、ワーズワスのためにこまめに時間を割いて兄妹に会い、案内役を務めている。21日にもジェドバでは昼食と夕食を共にし、自分の詩をいくつか朗読して聞かせたりした。翌22日も朝スコットが訪ねてきて1日を共に過ごし、彼らが別れたのは翌日のハウックでの朝食後であった。ドロシーの紀行文は実質的にはここで終わっている。懐かしいグラスミアまでは残すところ100キロ、その記述に割いた紙面は3頁である。スコットランド周遊は数日間のスコットとの交流を記して終了したと言ってよい。

私はメルローズ寺院さらにアボッツフォードにスコットの広大な館を訪ねた後、ワーズワスたちのルートからはずれて、ヤロー川に沿って南下することにした。ワーズワスの詩的世界にとってヤローは特別な意味を持っているからである。まず、帰宅してまもなく完成した‘Yarrow Unvisited’は、「この旅から生まれた詩篇の中でももっともワーズワス的である」⁽⁷⁾と評価されているのである。さらに1814年には妻とその妹サラと一緒にスコットランドに旅し、ワーズワスについてヤロー川を訪ね、‘Yarrow Visited’を作っている。また1831年には娘ドラとスコットランドに遊び、スコットと共に再びヤロー川流域を訪ね、‘Yarrow Revisited’をものしている。このヤロー3部作の制作自体、ワーズワスとヤローの緊密な関係を示唆していると言わなければならない。

セルカークでA7号線に別れを告げ、右折してA708へ入る。道路はヤローの流れに接したり離れたりしながら、水源の聖メアリ湖までゆるやかに続く。‘Water Place’の標識のある所で車を止め、橋上から流れを望む。写真で見なれていた光景がそこにあった。遠くの山の形も兩岸の木々の枝の張り具合も、岩をはんで白く泡立ち流れるさまも写真の風景と同じだ。とうとうここまで来たかという感動が胸に広がるのを覚えた。

ヤローを舞台にした詩やバラードは数多い⁽⁸⁾。ヤローは多くの詩人たちに靈感を与えてきたのである。ワーズワスは若い頃からこうしたものに親しみ、ヤローに特別な思いを寄せていた。しかし1814年その流れに対面したとき、その何の変哲もないさまに落胆せざるをえなかったのである。

And is this —Yarow?—*This* the Stream

Of which my fancy cherished,

So faithfully, a waking dream?

An image that hath perished!

‘Yarrow Visited’ (1-4)

「わが空想が大事に育んできた幻想の流れは、これだったのか」と、驚き、がっかりし、「幻は消滅する」のである。想像の思い描く世界は常に現実よりも美しいものである。そのことは勿論とうの昔に知っていたことである。だから1803年の旅ではヤローを訪ねなかった。

Be Yarrow stream unseen, unknown!

It must, or we shall rue it:

We have a vision of our own;

Ah! why should we undo it?

‘Yarrow Unvisited’ (29—32)

ヤローを見て、それまで心に抱いていた幻影をだいなしにすることを、詩人は恐れた。そして「ヤローのような所があると、心の中で知っておけば、もう十分である」(47—8)として、そうした思いは「悲しみ中にあるわれわれを慰めてくれる」(62)と詩を結ぶ。想像力が創造する世界の価値を高らかに歌うのである。

‘Revisited’は、61歳のワーズワスが、転地療養のためイタリアに発つ直前のスコットと共に、「過ぎ去った楽しかりし日々を思い出しながら」(24)ヤローの流域を散策したさまを伝える詩である。彼らは変わり、また常に変化してやまないのであるが、ヤローは「変わらない顔をもって迎えるのである」(35)。流れは「過去、現在、未来が調和のとれた統一体となって現れる」(29—30)というから、ここでは、時の流れと水の流れが融合しているのだ。有限な人間世界の無常と悠久なる自然の不朽性を対比した秀作であろうと思う。

*Recollections*には水への言及が多い。大小の河川、湖沼、海などに関する何らかの記述は毎日出てくる。まわりの自然を描写する彼女の筆は見事であり、読者の想像裏に鮮やかに実景が浮かんでくるようだ。8月22日付きの文に次のような水の魅力について語った件がある。「小川や河川の大きな魅力はその蛇行のままに流れを辿る自由さにある。静かにあるいは声高らかに流れようと、戯れながらあるいは穏やかにゆったり流れようと、あなたが好きなどんな雰囲気のもとでも楽しむことができる。流れの美は求めなければならない。喜びはその探求の中にある。湖や海の喜びは向こうからあなたのところへやって来る」。さまざまに姿を変えながら地表を移動し、宇宙を循環する水は詩人の想像力を刺激してやまないものであろう。川を遡るにしろ、流れに沿って下るにせよ、詩人はそこに象徴的な意味を見出そうとする。後年ワーズワスが“The River Duddon”を著わし、一筋の流れに人間の一生と人類の歴史を仮託し、さらに永遠なる生命を希求したのはその表れであろう⁽⁹⁾。このスコットランドの旅においても、一行はスコットランドのガイドブックを参考にしながら、溪流や滝を求めて森を逍遙するのである。前述したロスリン村では深い木々に覆われた北エスク川を辿り、廃虚の城(現在は個人の住居となっている)を見下ろし、「ロスリンほど快い峡谷を歩いたことはなかった」と記している。また、クライドの滝は「2つからなり、その間に20ヤード」ほどに見えるが実際はもっと広い傾斜になったスペースがある。滝つぼは堂々とした岩に囲まれていて、そのわきから、それが可能であるときはいつでも、木々(主にハンバミ、シラカンバ、トネリコ)が生えている。そのような川にとって、そこは荘厳な休息所である。滝そのもの

より荘重であると思う」と述べる(8/21)。キリンでは、「町のそばまで来ると、流れは大きな黒い石の間を抜けては、あちこちの岩にぶつかってごうごうと凄まじい音をたてる。中州が流れをあちこちに変える」とある(9/5)。あるいはキリ克蘭キーでは、「とても美しい風景、ガリー川が、高い所まで木々で覆われたでこぼこな丘の麓の岩の裂け目を送り下る」と描写し(9/8)、こうした例は枚挙に暇がない。

8月24日、私はキリ克蘭キーを探訪する。ヴィジターセンターでここでの有名な戦いを歌った詩を2篇売店で求めた。バーンズの‘The Battle of Killiecrankie’ (24行)と W.E.Aytoun の同名の詩(112行)である。ワーズワスもそこを訪ね、ソネット ‘In the Pass of Killicranky’ を作っている。館長さんとの話でそれについて触れると、彼女は驚いていた。その事実を知らなかったらしい。帰国後、その詩を含むドロシーのジャーナルの一部のコピーを送ったが、あの日の館長さんの質問が忘れられない。「ワーズワスをなぜ研究するのか」と、真剣に尋ねたのである。私は今でも彼女の質問を反芻している。

私は翌日ピトロホリを発ちダンケルドに向かう。A9を15分ほどで着く。シェイクスピアの『マクベス』で有名なバーナムの緑の丘はすぐ近くに望まれる。兄妹がダンケルドに到着したのは9月8日の午後であった。彼らは廃虚の寺院を見た後、ブナン川の滝まで庭師に案内してもらう。ごうごうという響きで滝が近いことがわかるのだが、ガイドはまず小さな建物の中に2人を案内しオシアン絵を見させる。その絵を描いた若い画家について話しながらガイドは姿を消し、レバーを引く。まるで魔法のように絵は壁の中に引っ込み、2人は華麗な部屋の入り口にいるのである⁽¹⁰⁾。「眼前の窓の向う側には、大滝——瀑布が四方に飛び散り、それは天井や壁の無数の鏡に反射して目も眩むほど賑わしい」。彼らはこの仕掛けに大笑いする。現在この建物は‘Hermitage’ (隠者の庵)と呼ばれ保存されている。しかしオシアン絵も鏡も取りはずされ外観だけが残る。ここからさらに溪流を奥に辿ると、1キロも行かないところに‘Ossian’s Cave’ と呼ばれる巨礫を積み重ねた穴ぐらがある。3畳ほどの薄暗い穴にしばし身を置く。この地方はオシアン伝説を連想させる風土である。ワーズワスが、「人里離れたこの静かな場所に、この峡谷にオシアンが眠る」(1-2)で始まる‘Glen Almain’を作詩したのは、翌日の旅に由来するのである。

4. バーンズを訪ねて

現在イギリスの車道はM、A、Bの3種に分けられている。高速道、国道、県道にあたるだろうか。車道はすべて舗装されている。暗い山中の森をぬい、起伏する丘陵地帯をうねるBロードは車もほとんどなく、低速で運転しても迷惑をかける心配もない。自然の魅力を満喫できる最高の道路である。ワーズワスたちはこうはいかなかった。勿論舗装されてなかったし、村と村と結ぶ道は歩

行者用の細い小道しかなかったという地域もあった。溪流と滝を訪ねるのに、案内者なしでは入り込めぬ迷路のようなところもあった。雨の日も多く、ぬかるみと苦闘しながら進むこともあった。

ワーズワスたち3人がバーンズの家と墓のあるダムフリーズに到着したのは8月17日の夜9時頃であった。ドロシーの紀行文は実質的にはバーンズ詣でから始まるのである。翌日聖マイケル教会の共同墓地に眠るバーンズを訪ねるが、彼が37歳の若さで人生にピリオドを打ったのは1796年であったから、死後7年が経過したことになる。墓は墓地の片隅にあるが、「その地点を示す石もなかった」。「100ギニーを集めて石碑を建てる」計画であると案内人から聞かされた。彼らは憂鬱で悲しいもの思いに沈みながら、バーンズの‘A Bard’s Epitaph’を口ずさんだ。

私が当地に到着したのは18日の雨上がりの夕方であった。あちこちで何度も道を尋ねてようやく聖マイケル教会にたどり着く。時計の嵌め込まれた焦げ茶色の尖塔が雨に洗われひとときわ鋭く曇天を破っている。墓地には自由に入れるようになっており、左奥の一隅に‘SITE OF ORIGINAL GRAVE OF ROBERT BURNS’の表示板を発見し、かつてのバーンズの墓とわかる。その後墓は右手奥のギリシャ風の白亜の御廟に移され現在に至る。1818年7月1日にこの御廟を訪ねたキーツは、「バーンズを祀るのに十分な大きさが私の趣味に合わない」⁽¹¹⁾と言っている。私の印象もそのようなものであった。長い間の風雪にさらされ文字も崩れて解読できないほど風化し、さまざまな形の墓碑が暗鬱な灰色や暗い茶色に溶け合い、陰鬱ながらも静謐な空間であるその墓地に、ドームの屋根をもつバーンズ廟だけが真新しい白に浮かび上がっている。全体の雰囲気調和せず、突出した落ち着きなきが感じられた。

キーツはその日の夕食後、ソネット‘On Visiting the Tomb of Burns’を作る。ワーズワスは4年後に‘At the Grave of Burns, 1803’、‘To the Sons of Burns’の一部、36年後に‘Thoughts’というバーンズ縁の3篇の詩を作った。ワーズワスがバーンズから多くの詩的影響を受けたことは推測に難くない。バーンズの最初の詩集は*Poems Chiefly in the Scottish Dialect*という名を持ち、1786年出版である。ワーズワス兄妹は翌年にはこの詩集をよく読んでいた⁽¹²⁾。スコットランド方言で書かれた詩はイングランド人には理解し難い部分もあったが、ワーズワスは国境に近いカンバーランド生まれであったから、楽しむのに苦労はなかった。農民や社会的底辺層の人々を方言で歌ったバーンズの詩は、詩の素材・題材や詩語に対するワーズワスの考えに重大な影響を与えた。それは『抒情民謡集』の優れた作品群と「序文」（1800年版）に結実すると思う。なお兄妹はスターリングで1冊本のバーンズ詩集を2シリングで購入している。旅の記念にしたのだろう。

バーンズが死ぬまでの3年間を過ごした家は教会の近くである。ワーズワスたちが訪問したとき夫人はあいにく子供たちと海に出かけて留守だった。仕えて5日目になる女中に中に招かれパーラーに通される。家の中はきちんと整理され、石の階段はきれいに磨かれていた。現在その家はバーン

ズ博物館となっている。入って左手のパーラーはお土産売場となっているが、他の部屋はバーンズ縁の遺品や、家具、調度品が置かれていて、当時を偲ばせるものがある。売店では話好きの館長さんがバーンズについていろいろ説明してくれた。日本人にとってバーンズは「蛍の光」の原詩者としてよく知られている。原詩は ‘Auld Lang Syne’ といっ、 ‘Old Long Ago’ (「遠き昔」) ほどの意味である。この歌は日本の卒業式で歌われ、別れの歌として哀愁ただよう雰囲気を持っている。しかしバーンズの原詩は別れでなく再会の歌なのである。

SHOULD auld acquaintance be forgot,

And never brought to mind?

Should auld acquaintance be forgot,

And auld lang syne!

(1-4)

「昔の友が、決して思い出されずに、忘れられてよいものか」と始まる原詩は、幼な馴染みが偶然出会い、昔の思い出を語り合い懐かしみながら、乾杯を繰り返すという歌である。また二人は別れなければならないのは暗示されてはいるが、中心テーマは再会の喜びである。再会の歌がなぜ日本では別れの歌になってしまったのか。それは日本語の歌詞のせいだろう。「蛍の光 窓の雪」という文句は、国文学者稲垣千穎の作詩による⁽¹³⁾。メロデーはそのまま借用し、明治14年『小学唱歌集』に発表された。なおメロディは2つあるということだが、私はお馴染みの歌の入ったCDしか求めなかった。別なメロデーのCDも求めればよかったと少々後悔している。なお私がこの研修の旅の初日、空港からロンドンに向かい、エアバスから下りたとたん、「蛍の光」のメロデーがオクスフォード通りの雑踏の中に響いていたのには驚いた。正装のキルトをはいたスコットランド人がバグパイプで演奏していたのだ。到着早々「蛍の光」かと思変な感じがしたが、思えばもともとこれは再会の喜びの歌なのである。5年ぶりに英国にやってきた私を歓迎してくれる歌なのであった。

ワーズワスたちはダムフリーズの喧騒を後にしてほっとする。詩人は都市の雑踏は苦手なのだ。4日後グラスゴーに到着するが、翌日には大雨のためという口実のもとに、有名な教会も見ずに早々と立ち去ってしまう。首都のエディンバラでも1泊だけで先を急いだのも、都会嫌いが真の理由かもしれない。ところで、ワーズワスたちは、「詩的な場所ではない」ダムフリーズで暮らしたバーンズが哀れでならなかったという。経済的困窮により税務署勤務を余儀なくされた詩人の晩年に同情を禁じえなかったのだろう。彼らは現在のA76号線を北上し、その日の宿泊地・ブラウンヒルを目指す。途中右手にエリスランドを遠望しながら通り過ぎてしまう。バーンズはダムフリーズに来る前、エリスランドに農地を借りて農場経営に努めるのだが、思うようにいかず、相変わらず貧しいままであった。バーンズの失望、落胆の日々を思い出すのが悲しいから、ワーズワスたちは詩人の農場を訪ねるのはやめたのであった。私は20日の朝エリスランドを訪ねた。小雨ながら降りやま

ぬ中に、いくつかの建物があった。当時の母屋（そこには現在の所有主の家となっている）、納屋、倉庫、家畜小屋などが、当時のままに並んでいるような印象であった。人の姿は見当らない。屋敷の裏手にはニス川がゆったりと流れている。バーズは牛馬の汚れをここで落としてやったに違いない。建物にはバーズ記念館となっていて、10時開館の表示板が見える。まだ9時半をまわったばかりだから無理だろうと思い車に戻ると、主人らしい男が雨の中をこちらに走ってくる。見学してよいということである。建物の中には200年前の大小さまざまな道具や農機具が保存されていて、農民詩人としてのバーズの一面をよく偲ぶことができた。彼が胸にわだかまる思いを詩として石で刻んだ窓ガラスも展示されており、富と名声と権力と幸福についての屈折した思いが直に伝わってくるようであった。

ワーズワスたちはレドヒルからラナクへ向かい、つとに知られていたクライドの滝を十分に堪能する。この流域は当時のピクチャレスクな美を求める旅行者は必ず立ち寄るスポットなのである。彼らはバーズの生まれ故郷・アロエイには行かず、グラスゴーへ抜け、さらにロモンド湖を経ていよいよハイランドへ入るのである。私は残念ながらクライドの滝を見る時間の余裕がなく、A76を北上し、途中A70に進路を変えてエアーに向かう。アロエイ探訪のためである。

21日朝バーズの故郷は晴れていた。A719に沿う彼の生家を訪ね、‘Tam o’ Shanta’の舞台になった教会（屋根が崩れ落ちている）や、石橋に向かう。酔ったタムが魔女や魔法使いたちの魍魎魅魍魎のさまを覗き見た教会であり、大声を出したために気付かれ追いかけられ、命からがらダウン川にかかる橋の上まで逃げるが、馬のしっぽを魔女にちぎり取られたという石橋である。スコットランド至るところでバーズの人気は今なお衰えないが、この近辺バーズ・カントリーはとりわけ観光客が多い。まさに国民的詩人となっているバーズを実感する。スコットもスコットランドのために大きな貢献をし、その尽力に対して貴族の称号を与えられ、エディンバラの中心には市内どこからでも望める高い記念塔・スコットタワーが建てられたのだが、国民の人気の点ではバーズに及ばないという印象である。その理由はいくつかあるだろうが、まずバーズは、晩年は税務署勤めの小役人であったが、一生涯のほとんどを通じて貧乏な百姓詩人であったことである。スコットのような広大な土地と豪壮な館を持たずに死んでいったことに、大衆は深い親密感を覚えるのである。さらに弱き者へのバーズの愛と共感に人々は感動するのだ。春まだ浅き頃、冷たい北風にめげずによく花開いた山雛菊をバーズの鋤が茎を砕き、掘り起こしてしまう。ひそかに寂しく横たわるその姿に、詩人は一途の愛に欺かれた乙女の運命を重ね、また欠乏と艱苦と戦いながら落ちぶれ沈みゆく詩人の運命を見る。あるいは畑の一隅にあった野ネズミの巣を掘り返してしまい、冬の寒風を避けることのできなくなったネズミにすまないと思う。弱きもの小さきものへの同情と思いやりに我々は打たれるのだ。

またスコットランド語で作詩したこともバーズ人気の一つと言わねばならない。彼は生涯で

600余の詩を作ったが、そのほとんどはスコットランド語である。標準的な英語を用いなかったところがスコットランド人の民族的アイデンティティに訴えるものがあるのであろう。スコットランドの歴史はイングランドとの長い対立抗争の歴史である。スコットランドがイングランドに最終的に屈服したのは1746年のカロデンの戦いにおいてであった。それ以降スコットランドの氏族制度が廃止され、固有の伝統文化が衰退し、ゲール語が消滅するという憂き目に会うことになる。ワーズワス兄妹がこの行程の最北部に近いファスカリのパブで2度も冷たい態度であしらわれ、泊めてもらえなかったが（9月6、7日）、これは高地人のイングランド人に対する怨みからきているとも推測される。何しろカロデンの戦いから60年も経っていないのである⁽¹⁴⁾。こうした精神風土のスコットランドにおいて、スコットランド語によるバーンズの詩は熱狂的に迎えられた。1786年の初版620部がアツという間に売り切れ、エディンバラから再版を出すことになるのである。

バーンズの人気はスコットランドの歌謡曲、歌曲のおかげでもあろう。古くからある歌詞を現代風に改作したり、新たに作詞した曲は300余りにのぼる。それらが『スコットランド音楽博物館』や『スコットランド創作歌謡歌曲』という本に紹介され、美しいメロデーと共に人々に歌い継がれていくことになる。私はピトロホリ（ファスカリは現在ここに編入されている）という町で、ダンダラック・ホテルに2泊した。このホテルは、夏目漱石が1902年秋にしばらく滞在した館（当時はホテルではなかった）として有名であるが、2泊目の晩、隣接したレクレーションランドでスコットランドフェスティバルが催された。高地地方の次第に暮れゆく澄みわたった谷間に、バグパイプ演奏、少女たちのスコットランド舞踊、歌謡曲独唱などが民族色豊かに繰り広げられた。あのとき歌われた歌謡曲にバーンズ作詞のものも当然あったと思われる。ともあれ、深いスコットランドの夜空と共に忘れられないイベントであった。

5. 山岳地帯へ

ワーズワス一行がロマンド湖畔の景勝地・ラスに到着したのは8月24日であった。ラスからハイランドが始まるとドロシーは記している。残念なことに日のささぬ曇天と寒さのため、壮麗な風景は楽しめなかったが、家のたたずまい、少年たちのキルト姿はいかにも高地地方に来たことを実感させた。コールリッジは体調すぐれず、散歩に出ず宿にじっとしていた。私はバーンズ詣でを終えてから、交通事情の悪い商業都市・グラスゴーを避けてロマンド湖へ直行する。幸運にもラスは見事な日本晴れ（?）、夏の陽光と暑さと透明に晴れわたった空、なだらかな対岸とベンロモンド山を映すコバルトブルーの湖は、目のさめるような風景美を私の眼前に広げてくれた。キーツがロマンド湖にたどり着いたのは7月14日頃であった⁽¹⁵⁾。素晴らしい天候に恵まれ、その美しい風景を手紙にインクでスケッチし、病床にある弟のトムに送っている⁽¹⁶⁾。

ワーズワスたちは翌日湖上の島巡りをし、どこか外国、例えば北アメリカにいるような思いを記している。さらに湖岸道路を快適な気分北上、ターベトに至る。翌日また舟を雇って湖上を北に進み、「ロブ・ロイの洞窟」で上陸し、インヴァスネイドを経て東のカトリーヌ湖へ向かう。私もターベトとインベルグラスを往復する観光船上から「洞窟」を眺めた。大きな岩がいくつ重なって合って少しばかり空間ができているようだが、はたしてスコットランドの義賊がそこに身を隠すことがあったのだろうか。兄妹は8月27日ロブ・ロイの墓の話聞き、9月12日には渡し守に教えられ、ロブ・ロイの墓を訪ねた（実はそれは間違いであったのだが）。そこはイバラやイラクサが占領し、いくつかの墓石があるが文字は風化して読めなかった。しかしワーズワスは2年後その思い出をもとに120行に及ぶ‘Rob Roy’s Grave’を作詩する。ロブ・ロイの墓は実はヴォイル湖畔のバルキデールの教会墓地にあり、兄妹はそれと知らずに翌日その墓を訪ねているのである。「マクグレゴーズ一家の墓地を見つけた。囲いの四隅に装飾用の球がついていて、興味をもって眺めた」とあるが、「マクグレゴ」こそロブ・ロイなのである。私もその教会墓地に立ち寄り埋葬地をしみじみ眺めた。黒い椰子の実のようなものがそれぞれ四隅に置かれ、それを4本の黒い鉄の梁のようなものがつないでいる。梁には3枚の白板が取り付けられ、中央の板には‘ROBERT MACCRECOR (ROB ROY)’ (MACGREGOR とはなっていない) の文字がある。妻は左、2人の息子は右側の板に没年と共に記載されている。バルキデールはワーズワスの代表作‘The Solitary Reaper’の舞台であるから静かな谷間であるはずだが、その日は数人の男たちが墓地の草刈りをやっていて、すさまじい機械音が周囲の詩的状況を壊していた。

8月26日から28日までの3日間は、ドロシーに大きな印象と感動を残した。ターベトの宿を出てからインヴァスネイドを経て、カトリーヌ湖、トロサクス散策、そしてまたターベトに戻る行程で、一行は2つの家族に世話になる。まずマクファーレン家の暖かなもてなしを受ける。快活で親切な夫人が快適なベッドと十分なおいしい食事を準備してくれた。次はカトリーヌ湖の渡し守一家である。家には煙がたちこめ目が痛いほどだったが、やさしい主婦の歓待に笑い声が絶えず、「手厚いもてなしと暖かな火に対して、これほどの深い喜びを感じたことはこれまでなかった」という。ワーズワスとコールリッジは干し草が、ドロシーはもみ殻がベッドであったが、快適な眠りを与えてくれた。昼間はあいにくの雨と寒さの中を行動しなければならなかったが、ヒースの想像を絶する色彩や、空と湖の融合から醸し出される幻想的な美しさに我を忘れるほどであった。帰路に2人のハイランドの娘に会う。渡し守の妹と彼の妻の妹であった。船がやってくるまでの数時間を共に過ごす。彼らの無邪気な楽しみ、親切な心、特に姉娘の容姿の素朴な美しさは忘れられないものとなる。この出会いをもとに、ワーズワスは帰宅して間もなく‘To a Highland Girl’を作った。

For I, methinks, till I grow old,
As fair before me shall behold,
As I do now, the cabin small,
The lake, the bay, the waterfall;
And Thee, the Spirit of them all!

(74-8)

「シャワーのように注がれる美はそなたの地上の賜物」(1-2)と始まるハイランドの少女は、「幻」(17)となり、最後には船着場、湖、入り江、滝などの「精霊」となってしまう。つまりこの詩はルーシー詩群に含まれる。兄妹はよほどこの「ロマン的な場所」が気に入ったのだろう、帰路の9月11-14日にも渡し守の家を再訪し、カテニーナ湖やヴォイル湖畔に遊び、‘Stepping Westward’、‘The Solitary Reaper’を得るのである。

29日、一行はターベトから西へ進路を取りケアンドーへ向かう。途中のアロチャでコールリッジは兄妹と別れ、単独行動をとることになる。理由は表面上はコールリッジの思わしくない健康状態のようだ。エディンバラへ出て帰宅することが示唆されているのだが、その後のドロシーの紀行文には意外に行動的なコールリッジが所々で現れる。孤独と自由を楽しみ、精力的に歩いたようである。コールリッジを気遣いながら晴れやかな気持ちになれない兄妹の後を追って、私は快晴のA83を走る。すぐに最初の海水湖ロホ・ロングに出ると、前方上空に「奇妙な生き物の不気味な姿」を目撃する。コブラーの山頂である。それを車窓に眺めながらグレンクローという峡谷をうねるように抜けると峠に到着、一休みである。車では造作のないことだが、馬車や徒歩では難儀しただろうと想像する。日曜日でもあったからであろう、峠には多くの人々が空と山と緑なす谷間の果てしなく広がるパノラマを楽しんでいた。ただ物売りの車のエンジンが深い静寂を破っているのが残念であった。ドロシーは「ロマンチックな風景だが、陽気というよりは陰鬱である」と記しているが、それは天候とコールリッジのせいであったかもしれない。峠には‘REST & BE THANKFUL’と刻まれた里程標のような、高さ60センチほどの石が建っている。上部はゆるやかなアーチ状になっていて腰を下ろすにいいかもしれない。ドロシーは、「ウエイド大佐の連隊によってこの道路が造られたことがこの石に刻まれている」と、記している。それは軍用道路として開かれたらしい。私はその文字を写真に収めた。キーツたちは‘REST & BE THANKFUL’を宿の名前と勘違いし、朝食をここで摂る予定で歩いてきたのだが、ただの石であることがわかり、もう5マイル歩かなければならなかった、とトムに伝えている⁽¹⁷⁾。ドクター・ジョンソンはワーズワスより30年前の1773年10月26日インベラリからターベトに向かう途中グレンクローを通過している。ワーズワスやキーツとは逆コースである。彼はこの峡谷を「暗くて荒涼とした地域」と、ドロシーと同じ印象を述べ、例のマイルストーンについても触れている⁽¹⁸⁾。

ここからグレンコーまでの5日間は難儀したようだ。起伏の激しい山道のせいだろう、馬は背中をすりむくし、エティヴ湖の渡し船から馬が水中に落ち結局泳いで渡る始末である。あるいは馬車が川にひっくり返り、車輪を鍛冶屋で修理してもらおうというハプニングもあった。グレンコーは1692年の大虐殺で有名な所である。マクドナルド一族がイングランド政府の卑劣な陰謀で虐殺されたのは兄妹が訪ねる110年前の話であるが、ドロシーは「再建されたりっぱな白い地主の家」を訪れ、「この家で恐ろしいグレンコーの虐殺が始まった」と記している。ドロシーのこの谷間の印象は私のも代弁してくれる。ただ山、山、山。90度に屹立する大きな岩石の塊、それはミルトンがサタンの崇高な姿を表現した一句、‘His stature reached the sky’を想起させるものであるが、そうした「塔のように聳え立つ」⁽¹⁹⁾山塊の麓を道路は縫ってやがて南下する。

註

- (1) このグループの詩の一部は“Poems Written During a Tour in Scotland”と題されて *Poems in Two Volumes*(1807) の第二巻に収められていた。 *Wordsworth's Poetical Works* Vol. III ed. by Ernest De Selincourt and Helen Darbishire. Oxford: Clarendon Press, 1946. p.438
- (2) Mary Moorman, *William Wordsworth A Biography The Early Years · 1770—1803*. Oxford: Clarendon Press, 1957. p.590
Dorothy Wordsworth, *Recollections of a Tour Made in Scotland*. ed. by Carol K. Walker, Yale University Press, 1997. P.19
- (3) *Journals of Dorothy Wordsworth*. ed. by E.De Selincourt, Vol.1 London Macmillan, 1941. なお *Recollections* からの引用はセリンコート版からである。
- (4) 岡地嶺、『ロバート・バーンズ 人・思想・時代』（開文社出版、1990）4、37、38頁。
- (5) このソネットのほかに、“X Address to Kilchurn Castle, Upon Loch Awe”全43行のうち、1—3行はキルカーン城を訪れた8月31日当日に作られた。他の詩はグラスミアに帰った後に回想裏に成ったのである。
- (6) *A Biography The Early Years*. p.597
- (7) *ibid.* p.597
- (8) *Yarrow Its Poets And Poetry*. ed. by R.Borland, F.S.A. Galashiels; A.Walker & Son. 1908. ここにはワーズワスの3篇を含め計49篇が収められている。
- (9) 『ロマン派文学のすがた』（仙台イギリス・ロマン派研究会編、1994）所収、拙論「ワーズワスにおける水と時間の流れ——後期の詩を中心として」参照。
- (10) Malcolm Andrews, *The Search for the Picturesque*. Scholar Press, 1989. p.216

- (1) Carol K. Walker, *Walking North With Keats*. Yale University Press, 1992. p.160
- (2) *Wordsworth's Poetical Works* Vol.III p.442
- (3) 東浦義雄；『スコットランドX I の謎』（大修館、1988）45頁。
- (4) *Recollections*. ed. by Walker. p.4
- (5) グラスゴーからクラデクまで、ワーズワス兄妹（8/23-30）とキーツ（7/14-18）の辿ったルートは重なる。Walker, *Walking North With Keats*. p.26
- (6) *ibid.*p.184
- (7) *ibid.*p.184
- (8) George Birkbeck Hill D.C.L., *Footsteps of Dr. Johnson (Scotland)*. E.J.Morten: Didsbury Manchester. p.253-4
- (9) 'XVII The Blind Highland Boy' 1.13 なおこの詩はグレンコーに近いレヴィン湖畔に住むハイランドの少年を素材にしている。

